



自己評価的動機づけ(SEM)モデル*

*本モデルの詳細は、教心研(32巻、286~295)を参照のこと。

れた。

第2章「内発的動機づけにおける外的報酬の役割に関する実験的検討と本研究の目的—自己評価的動機づけモデルの提唱—」では、2つの実験により前章で指摘された問題点が確認され、それらの結果に基づきSEMモデルが提唱された(図参照)。このモデルの実証が本研究の目的とされた。

第3章「自己評価的動機づけモデルの実証的検討」では、9つの実験的研究によりSEMモデルが実証された。1節~4節では、外的報酬として言語的報酬、物質的報酬、フィードバックなどが用いられ、本研究のために開発された「自由課題選択法」によりSEMモデルが検討された。5節以降では、外的報酬に類似した、①評価の予告、②報酬の予告、③言語的報酬量、④物質的報酬量、⑤原因帰属の教示、といった外的操作を用いて検討された。その結果、SEMモデルは実験的にほぼ支持された。

第4章「自己評価的動機づけモデルに基づく動機づけ測定尺度の開発と検討」では、11の研究により前章で実験的に検証されたSEMモデルが、学業達成という現実的な場面で検討された。最初の2節では、Harterの内発的動機づけに関連した尺度を参考にして、SEMモデルの認知、感情、動機づけレベルの諸要因を測定できる

尺度の構成が行われ、それらを用いたパス解析によりSEMモデルの因果関係が検討された。3節以降では、外的報酬に相当する、①称賛・叱責、②養育態度、③教師の性格特性、④教師のリーダーシップ、⑤学習指導法、といった外的変数を用いてSEMモデルが検討された。その結果、いずれの研究でもSEMモデルを支持する知見が多く得られた。

第5章「教育への適用可能性の検討と全体的考察」では、これまでの研究成果を教育現場に適用する試みとして、SEMモデルに基づく教育・臨床的な指導が、「やる気」のない生徒の治療に有効であることが報告されたのち、本研究全体の要約と今後の研究課題が指摘・討論された。

筑波大学

教育学博士

佐々木正人 「イメージ知覚的構造に関する実験的研究」

本論文では、我々の内的表象に非視覚的な起源の存在することを明らかにするために、実験的な研究が行われた。全体はIV部9章から構成されている。

第I部「序論」では、イメージという概念の成立過程を歴史的に概観し、心理学におけるイメージ研究の前提とも呼べるものが確立する背景を探った。第1章では、まず、二元論の枠組みで、イメージを精神の領域ではなく、知覚と同様に身体(事物)に属する現象と位置づけ、イメージと知覚とを類同視する発想をはじめて体系化した17世紀のDescartesにはじまる、知覚類同説的イメージ論の流れを古典的な哲学者の主張の中にふり返った。そして、このような立場が、20世紀初頭の心理学者によるイメージ研究、更には、1960年以降、ネオメンタリズムの動向が再び盛んにした現代のイメージの実験研究の中に、強力なパラダイムとして侵入した事情を明らかにした。このような概観は、最新の「イメージ論争」の根本問題が、実は、極めて古典的なイメージ観をめぐってのものであることも浮き彫りにした。

第II部「盲人の空間イメージに関する研究」では、4章にわたって、先天性の盲児(者)を対象とした実験研究及びその理論的考察が行われた。ミニチュア空間上に散在する複数の対象物の位置を記憶し、様々な対象の背後から、全体の布置を予測する空間イメージの変換課題を用いた検討の結果、空間を触運動感覚を用いて能動的に探索する条件では、先天盲も晴眼の者と同様なレベルのイメージ操作が可能であることが明らかとなった。盲人に困難が見られたのは、空間を提示する情報が感覚的な成分を含まない言語的提示条件に限られた。このよう

な結果は、最新の多くの実験事態（メンタル・ローテーション、イメージ・スキミング等）を用いた盲人のイメージに関する研究の結果とも一致していた。

理論的考察では、上述した結果をふまえ、イメージを視覚過程の延長上に発想する、狭い視覚同型論の枠組みから解放し、multi-modalなものとしてとらえ直す必要性が述べられた。そしてこのような方向は、これまでのイメージ研究が十分に明らかにできなかった。イメージ現象の認識に果たす機能についてもアプローチしうる可能性を持つことが示唆された。

第Ⅲ部「イメージの身体・運動感覚的起源に関する研究」では、3章にわたり、日本人に特有な書字類似動作（空書）を対象とした実験的研究が行われた。漢字要素を統合する課題を用いた実験の結果、空書が、ほぼ日本人成人のすべてに出現する動作であり、この動作には、内的なイメージ操作をスムーズに進行させる効果のあることが示された。また発達の検討は、空書が10歳に至り、6割に近い児童に現われはじめ（9歳までは2割程度の出現率）、そのイメージに及ぶ効果は11歳頃から明確になることを示した。更に、漢字圏（台湾）、非漢字圏（アメリカ、イギリス等）からの留学生を対象とした比較文化的検討は、空書が漢字圏の成員に限定される、漢字習得経験に起源を持つ動作である可能性を支持した。

第Ⅳ部「総括」では、本論文の提出した問題をより広い観点から論議した。まず空書研究がイメージの非視覚的な起源である、身体運動感覚的な成分について示唆したにとどまらず、認識の生成における「身体」の役割についても新しい観点を提示するものであることが述べられた。そして「身体的認識論」としての性質を持つ諸理論に触れた。最後に、空書研究がノンバーバル行動研究などと異なり認識を生成するものとしての身体動作研究という、「身体」研究の新しい次元を拓くものである点も指摘された。

名古屋大学

教育学博士

松田 惺「子どもの親同一視の測定に関する方法論的研究」

親同一視が、概念としては重視されながらも、研究として方法論的に行き詰まりの状態になることをふまえ、測定方法に関して方法論的観点から検討を進めていくことが必要であり、今後、家族関係のより複合的な相互関係を理解していく上でも、親同一視の有効な測定方法を見出すことが必要であると考えた。

本論文においては、親同一視に関する理論的な検討がその重要な一部をなしており、同一視の概念、親同一視を測定するための基本的な考えかた、指標のとらえ方などについて、これまでの数多くの研究についての分析を行った。その結果、第1に、同一視と、動機づけられた構えを意味する概念として規定されるべきであり、従って、それは、対象である親の行動を模倣する際の先行変数として位置づけが与えられるということ。第2には、同一視が必ずしもモデルに対する明確な意識を伴った過程とは考えられずに、従って、間接的な測定方法の適用が妥当であるということ。そして第3に、同一視が、親との関係で、児童期において非常に大きな心理的意味をもっていること、などが明らかにされた。

このような検討に沿って、同一視関係を測定するために、できるだけ多面的な性格、行動特性を含む測定尺度を構成し、その多面的項目に対する「自己理想」および「認知した親」の評定値の近似性から同一視の指標 (assumed ideal similarity) を導いた。

調査Ⅰでは、自己受容との関連で、測定尺度の一般的な適用の可能性を検討した。また、同一視の個別的意味を考慮して、尺度項目に対する個人ごとの項目の重みづけを加えた分析を行ったが、その重みづけの妥当性は示されなかった。調査Ⅱでは、YG性格検査を外的な適応の基準として、従来のいくつかの同一視指標についての妥当性を比較検討し、指標としては assumed ideal similarity を単純距離として算出した場合が、最も妥当な指標となりうることを見出した。なお、小学3年生から大学生までの発達の資料の分析を通して、小学5年生が同性の親との同一視得点をもっとも高く、上の論述に対応する結果が得られた。

初期の仮定に立って、相関的分析にとどまらず、得られた指標が動機づけの強さ、すなわち先行変数としての意味をもち、モデルとなった親の行動の模倣に影響するかどうかを検討した。対象は、小学校5年生とし、この年代の子どもにとって意味のある行動として、記憶促進のための物語文の構成という課題を取り上げた。

実験Ⅰでは、女兒の母親に対する同一視が測定され、そこで母親モデルと未知女性モデルの群にわけて、モデル観察後の模倣がどのように生ずるかを検討した。結果は母親モデル群に模倣反応が多く、同一視の指標として assumed ideal similarity が妥当であることが示された。実験Ⅱは、男児についても同様な予測が成り立ちうることを検討するとともに、男女児共に両親の間の相互作用が、同一視要因との関連で現れてくることを予測し、同一視の指標の妥当性についての検討を深めた。結果は男児の場合に、同一視の強い父親の母親モデルに対